

アッシリヤの台頭とその脅威

① ティグラテ・ピレセル 3 世(別名:プル) (前 745~727 年)

- 前 745 年にアッシリヤの王となったティグラテ・ピレセルの台頭によって西方拡大がなされ、前 738 年までに、シリア諸地方の支配が確立された。アラムとイスラエルから貢税を受け取った。4 年後には、アッシリヤの支配がペリシテへと拡大した。
- 年ごとに強まるアッシリヤの脅威に悩まされた周辺諸国(アラムの王レツイン、イスラエルの王ペカ)、およびエドム、ペリシテが軍事同盟を結ぶが、ユダ王国はこの同盟の危うさを見抜いて同盟に加わりたくはしなかった。そのために、反アッシリヤの連合軍がユダを攻撃するが、すでにユダの王アハズはアッシリヤに援助を求めていた。しかし、その払った代償は大きかった。
- ティグラテ・ピレセル 3 世は連合軍を打ち破り、ダマスコの住民は捕囚とされた。また大勢のイスラエル人もアッシリヤに移住させられた。

Ⅱ列王記 15:29、16:5~18

I 歴代誌 5:6, 26

Ⅱ歴代誌 28:16~21

② シャルマヌエセル 5 世(前 727~722 年)

- アッシリヤの傀儡王であったホセアが突然アッシリヤに反旗を翻し、エジプトに助けを求めた。アッシリヤは軍を送り、サマリヤを 3 年に渡って包囲し、前 721 年にサマリヤは攻め取られて陥落。

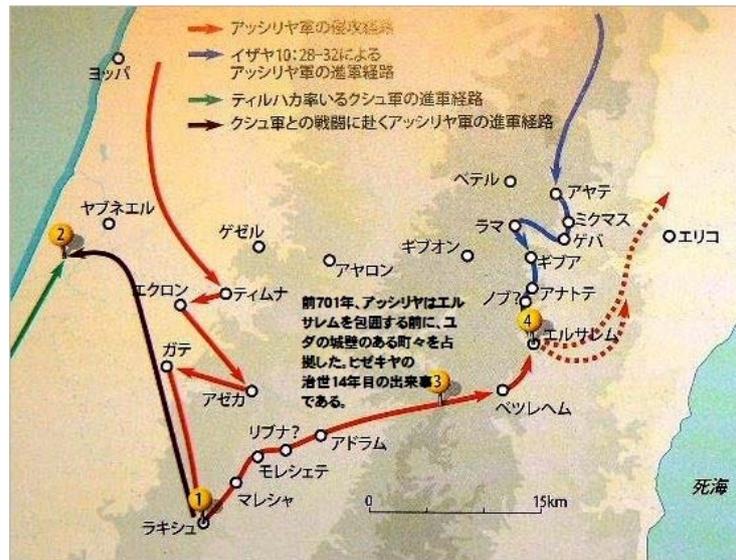
Ⅱ列王記 17:1~18:12

③ サルゴン 2 世(前 722~705 年)

- 前 721 年に北イスラエル王国が減んだ後、神の民は小さなユダ王国だけとなった。前 715 年、ユダの王はヒゼキヤ王に変わった。その頃のアッシリヤの王はサルゴン 2 世で、帝国内の各地で勃発する内乱、特に、膝元のバビロンの反乱の制圧に追われていた。
- ヒゼキヤは祖父以来の親アッシリヤ政策をとっていたが、これを好機到来と見なし、反アッシリヤ政策を取り、ダビデ王国の再統一を図るべく宗教改革を行い、政治機構を改革し、軍備の増強を推し進めた。⇒Ⅱ列王記 18:3~6
ヒゼキヤがなぜこれらのことをなし得たのか、それはアッシリヤの勢力が自国内にとどまったためである。
- ところが、前 713~712 年頃、エジプトのパロの後押しによってペリシテのアシュドデに反乱が起きた時に、アッシリヤのサルゴン 2 世は直ちに將軍タルタンを遣わしてアシュドデを攻略すると同時に、そこから東に向けて、ガド、エクロンなどの主要都市を制圧し、アッシリヤの勢力はユダの王国を取り囲むように、エジプト川の方まで伸びた。政治的に見るならば、ユダ王国が独立を保ち続ける可能性はほとんどない。ヒゼキヤの改革もすべて水泡に帰すと思われた時、前 705 年、アッシリヤの王サルゴン 2 世が死んだのである。
- このときも、ヒゼキヤにとってはユダ王国の再起の絶好の機会であった。アッシリヤ帝国の喉元を脅かすバビロンもエルサレムに使者を送り、ヒゼキヤ王を支援することを約束した。⇒Ⅱ列王記 20:12~18
ヒゼキヤもアッシリヤによる危機は再び到来することを見越して、エルサレムの城壁を補強している。ヒゼキヤのトンネルと言われる水路を造ったのもこの頃である
- ヒゼキヤの参謀たちの影響で、エジプトと契約を交わし、軍事協定を結んだのもこの頃である。しかしエザヤはそのことに対して、主の叱責を伝えている。⇒イザヤ書 28:14~15

① セナケリブ(前 705～681 年)

●サルゴン 2 世の跡を継いだセナケリブは、手こずっていたメソポタミヤの各地の反乱を鎮めた後、前 701 年、いよいよパレスチナ諸国の不穏な動きを封じるために、大軍を率いて南下し、ユダを侵略し始めたのである。**ヒゼキヤの治世 14 年目**である。ユダの国家最大の危機であった。



⇒エルサレムの包囲—Ⅱ列王記 18:13～19:13、イザヤ 10:28～32

●ヒゼキヤはこの国家最大の危機に際し、どのようにして乗り越えたのかを知ることは重要である。その最大の要因とは何か。その要因とは、王と民とのゆるぎない信頼関係である。この信頼関係は一朝一夕にして築かれたものではない。ヒゼキヤ王の霊的領域における改革(Ⅱ歴代誌 29:10)。過越の祭りの執行(Ⅱ歴代誌 30:1)。そして罪から離れて主に立ち返りの奨励。Ⅱ歴代誌 32:1 にはこう記されている。「これらの誠実なことが示されて後」に、アッシリヤのセナケリブが来襲し、ユダに入り、城壁の町々(46)を占拠したのである。すでに準備は整えられていた。しかも重要な準備が。**エルサレムの包囲の出来事の一部始終に、ヒゼキヤの主に対する「誠実さ」が大きくかかっていたのである。**

●セナケリブはユダの城壁のある町々を占拠した、その最大の町はラキシュである。セナケリブはエルサレムの外側に宿営を張ったが、主のひとりの御使いによって、18万5千人が大打撃を受けた。それゆえ、セナケリブは退却を余儀なくされて二ネベに帰った。前 681 年、セナケリブは二人の息子によって暗殺された。